



Number 27

June, 2023

「アン・ラドクリフの娘」としてのエリオット

——日本オースティン協会・日本ジョージ・エリオット協会合同シンポジウムに参加して
早稲田大学教授 木村 晶子

昨年6月の日本オースティン協会大会では、前年に続いてエリオット協会との合同シンポジウムが企画され、アン・ラドクリフがテーマとなった。私はエリオット協会からの唯一の参加者として、三馬志伸先生、大河内昌先生、小川公代先生と共に登壇させていただいた。近年の研究テーマが〈女性のゴシック〉で、ラドクリフの代表作『ユドルフォ城の怪奇』に関する紀要論文が公開されていたためか、2021年にこの大著の邦訳出版という偉業を成し遂げた三馬先生からお声がけいただいたことだった。エリオット協会大会は校務と重なることが多く、エリオット協会員としての活動もしていない私がシンポジウムに参加するのも憚られたが、結局お引き受けすることとなった。ギヤスケルやブロンテを取り上げて、ヴィクトリア朝女性作家におけるラドクリフの影響について話そうと思ったものの、当初はエリオットとラドクリフの接点が見つからなかった。近年、ゴシック文学の観点からのエリオット作品論も出版されているが、ラドクリフの影響は論じられて来なかったこともあり、特にエリオットに言及しなくてもよいというお許しを三馬先生からいただいたほどだった。

しかし、ラドクリフの作品における感受性に関する主題——過剰な感受性の抑制と、思いやりと感受性に基づくケアの重要性は、多くのヴィクトリア朝小説に描かれており、考えてみるとエリオットの作品もその例外ではなかった。そもそも18世紀において、感受性は他者の痛みを感じる力、充実した生の力として美德の指標となる一方で、過剰な感受性は性的規範からの逸脱をもたらすばかりか、他者との境界を危うくし、階級制度崩壊の源になると危険視された。感受性の育成と制御はラドクリフの作品に限らず、近代小説の主要なテーマのひとつでもある。

ギヤスケルのゴシック短編やブロンテの作品と違って、エリオットの主要作品には超自然的要素は見られないが、例えば『フロス河畔の水車』のマギーの表象には感受性の抑制の問題が読み取れる。また〈女性のゴシック〉に頻出する、結婚のもたらず牢獄に囚われるヒロインの苦難とその克服というテーマは、『ミドルマーチ』のドロシアや『ダニエル・デロンダ』のグウェンドレンにも見出せる。シンポジウムでは、故川本静子先生の名著『ジェイン・オースティンと娘たち』(1984) にならって、おこがましくも「アン・ラドクリフと娘たち」という題にして発表した。エリオットも確かに「娘たち」のひとりに含まれるように思えた。

さらに、エリオットの『剥がれたベール』(*The Lifted Veil*, 1859) にも、ラドクリフとの接点が発見できる。このゴシック的中篇はエリオットには珍しく、他人の心の声が聞こえる超能力をもつ男性を主人公にしており、彼は凡庸で卑小な他人の精神を知ること、他者への共感を失い、ますます孤立する。ゴシック文学の定番と言える家父長的権力の犠牲者となる女性も登場せず、女性の監禁や解放という〈女性のゴシック〉的テーマも見られないが、彼の超能力を小説家の想像力に重ねて、その苦悩をエリオット自身の女性作家ならではの不安や無力感と重ねるフェミニズム的解釈もなされてきた。主人公の悲劇を

過剰な感受性をもたらす不幸の一例と考えれば、ラドクリフ的主題と通じるかもしれないが、一層興味深いのは、主人公の敏感過ぎる聴力だった。

ラドクリフの作品、特に『ユドルフォ城の怪奇』でも、緻密な情景描写だけでなく、謎めいた歌声、不気味な足音、正体不明の楽器の音など、数々の聴覚的效果による恐怖の演出が見られる。『剥がれたベール』では、主人公は幼少期から外界の音に過敏に反応し、他者の意識も、逃れられない騒音として彼の知覚領域を侵すことになる。エリオットは執筆時代に、ヘルムホルツの音響生理学や共鳴理論など、音に関する科学的言説に強い関心を抱いており、他者への共感という感受性の肯定的効果が聴覚と密接に関わっているという批評家の議論もある。エリオットは、ロマン主義的手法によって構築されたラドクリフの空間とは異なるリアリズムによって小説空間を創り上げたとはいえ、どちらの作家も読者の感覚に最大限に訴えかけ、小説における空間の創造を極めた作家と言えるのではないだろうか。

ということで、シンポジウムではラドクリフの遺産とも言える技法や主題がヴィクトリア朝女性作家の作品にどのように継承され、変容しているかを駆け足でたどったが、それはまたエリオット文学の奥行きの高さ、幅の広さを知る作業にもなった。ラドクリフの作品が、最終的には超自然的要素に合理的説明を与え、ヒロインの幸福な結婚という結末に至る、オースティンの成長物語でもあるのに対して、『剥がれたベール』では不信と不和に満ちた世界の中で主人公は孤立し続け、予知した自らの死に向かうだけである。しかし、いずれの空間でも読者はことばによって構築された空間の中で感覚を刺激され、この世ならぬ人物たちが生き生きと表現される読書の醍醐味を味わうことになる。

エリオットの人生については、その並外れた知力と同時に愛情を強く求める傷つきやすさが非常に興味深く、尊敬すると共に愛おしくもあり、エリオットの伝記はあれこれ愛読してきた。在外研究期間には、ナニートンで開かれた英国エリオット協会に参加して、ゆかりの地を訪ねることもできた。学生時代から『ミドルマーチ』には特に感銘を受け、『剥がれたベール』の独特の不健康さにも惹かれたが、時を経て、ラドクリフとの接点を模索することで改めてエリオットの作品のもつ〈文学の力〉に触れる思いだった。ヒロインが監禁される物語とはいえ、ラドクリフの描く世界には常に彼方への甘美な憧れがあり、エリオットの世界にはむしろそうした憧れが否定される苦い現実の失意がある。しかし、その苦さのリアリティと失意をも包み込むエリオットの小説空間の大きさの魅力が、この年齢になってようやくわかってきたようにも感じるのである。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆ ◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆ ◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆ ◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆
日本ジョージ・エリオット協会 第25回全国大会報告
2022年12月10日(土) 日本大学法学部にて開催

■研究発表1

出会わない二人——『ミドルマーチ』におけるメアリとドロシアの問題——

徳島文理大学大学院文学研究科博士前期課程 中西 温子

今回の発表では『ミドルマーチ』の登場人物の一人であるメアリ・ガースを、ドロシア・ブルックとの関係性に注目して考察した。様々な人間が交差することによって『ミドルマーチ』という物語が展開していく中、主人公的な要素をもつドロシアとメアリは、物語の最初から最後まで出会うことがなく、ここには作者エリオットの何らかの意図が込められているはずであるという仮説のもと、以下の内容を結論付けた。

それはメアリとドロシアという人物が出会っていないことに注目することで『ミドルマーチ』の中にある種のパラレルワールド的な要素を読み取ることができる、というものである。具体的には、メアリとフレッドが位置する世界と、ドロシアとラディスローが位置する世界という、はっきりとは見えにくい二つの世界の切り分けが存在するということになる。このことから『ミドルマーチ』は19世紀のリアリズム小説でありながら後に登場するパラレルワールド的な手法を取り入れた小説だと言え、それを踏まえたいうで考えると、メアリとドロシアが出会わなかったのは単なる偶然ではないことが分かる。

「出会わない二人」に加え、この2名の両方に「出会う」リドゲイトとロザモンドに注目することで『ミドルマーチ』という小説における二つの世界の切り分けをさらに深く読みとることができると考えられるが、これについては今後の課題とする。

■研究発表 2

ロザモンドがリドゲイトに幸福をもたらした可能性 ——シンパシーに乏しい登場人物の功績の再評価

同志社大学嘱託講師 石井 昌子

19世紀イギリス小説のリアリズムの核心には見解の一致がないが、エリオットが *Adam Bede* (1859) で示した心理や外的事実の詳細・忠実な記述に加え、物語の蓋然性を中心的性質と考える。*Middlemarch* (1871-72) 以前のエリオットの小説においては、シンパシーに乏しい人間は、改心しない限り個人や社会にとって有害分子であった。

さて『ミドルマーチ』の“Prelude”が言及する、後世に名を遺すことを目指しつつ平凡な人生に甘んじる後世の Saint Theresa は、Dorothea を指すと一般に考えられている。しかし、最初に書かれたのが第 15 章であることから、リドゲイトの人生も含むと思われる。そしてドロシアの描き方から分かるごとく、エリオットは平凡な人生による人類への貢献を肯定している。

Rosamond は、シンパセティックな側面もあるが、夫 Lydgate の研究に対する彼女の無理解と利己的態度により二人の会話は平行線を辿り、ロザモンドの身勝手な被害者意識と、それに譲歩して研究を諦めるリドゲイトの苦しみが詳細に描かれている。しかし結果的には、ロザモンドは時期尚早で結果の出ない研究の代わりに、彼を彼が必要とする家庭と優秀な医者としての誇りに導く。ここに平凡をよしとするエリオットのリアリズムの完成が見られる。さらに掘り下げて考えたい。

■シンポジウム

響き合う作品世界—G.エリオットと 20 世紀、21 世紀の作家たち (V. Woolf, E. Bowen, A. S. Byatt, & A. Soueif)

はじめに

Jane Austen の Ann Radcliffe のゴシックロマンスに対する揶揄や批判、Charlotte Brontë による Austen 批判など、総体的にイギリスの女性作家は、過去の先輩作家たちを意識し、批判しながら自分の文学の道を探ることが多い。George Eliot についても同様のことが言える。1850年代後半、小説を書くことを考えていたエリオットにとって、その頃出版されたある種の女性作家の小説は、許しがたいものであった。1856年に *Westminster Review* 誌に載せた評論 ‘Silly Novels by Lady Novelists’ において、エリオットは、Lady Chatterton の *Compensation* (1856) に対して、そのリアリズムの欠如を強く批判している。エリオットは、この評論をウェストミンスター・レビューに送ったあと、10日して ‘Amos Barton’ を書き始めているので、‘Silly Novels’の作家たち批判は、エリオットに自己の文学の方向をより強く意識させるものにもなっていたと言ってよいのではないだろうか。

Virginia Woolf は、このようなイギリスの女性作家の動向を文学の伝統という観点で見ている。ウルフは、「女性だったら、自分たちの母親を通して過去を考える」、つまり女性作家たちは女性の文学の伝統に連なってきたことを指摘している。一方で、その伝統はあまりに些少なものだ、という認識が女性作家にのしかかっていたことをウルフは忘れてはいない。オースティン、ブロンテ、エリオットによる過去の作家批判は、そのような伝統が不足しているがゆえの批判であり、そこから自己の文学を創り上げてきたとウルフは見ている。

では、現代の女性作家たちは、G.エリオットとどのようなつながりを持っているのだろうか。現代の作家たちとエリオットの関係を考えてみると、エリオットの新しい側面が見えてきはしないか、ということも含めて、4名の現代作家たちとエリオットの文学世界の響きあいを考察した。 (窪田 憲子)

■報告 1

G.エリオット『ダニエル・デロンダ』と V.ウルフ『幕間』にみる「個」と「集合体」の関係

神奈川大学非常勤講師 木下 未果子

エリオットとウルフは、最後の長編小説で“separateness and communication”（『ダニエル・デロンダ』）、“unity and dispersity”（『幕間』）というキーワードを用いて、人間の「個」の確立と彼らを取り囲む「集合体」との関係のあり方を問う問題意識を示す。個人間、民族間、国家間において対立する価値観が混在する中で異質性を抑圧し排除しようとする人間の性を十分に認識する二作家が、その対抗策として辿り着いた先は、価値観の転向を強いる圧力から解放された、相違を受容し混ざり合う集合体を生み出すことであった。その構築を担うのは、Daniel Deronda や La Trobe といった既成のイギリス社会の周縁にいるアウトサイダーである。彼らは従来の歴史観を覆し無名の人々が紡ぎ続けてきた人間の歴史を土台として思索し行動する。両作品からはこのような近似する作家の人間観、歴史観、世界観が窺える。だが一方で、『ダニエル・デロンダ』では歴史は修正され前進するという希望が感じられるが、『幕間』では、苦闘は繰り返され先行き不透明という印象が残る。これがエリオットより 60 余年後に生まれ、二つの世界大戦の戦間期を生きたウルフが実感した人間社会の現実であり、ヴィクトリア朝作家エリオットとの相違も明らかである。

■報告 2

E.ボウエンの後期作品（『心の死』、『エヴァ・トラウト』）における感情表現——

G.エリオットの後期作品（『ミドルマーチ』、『ダニエル・デロンダ』）との関連において

東京家政大学名誉教授 伊藤 節

エリオットを軸に 19～21 世紀の響きあう文学世界を検討するという今回の企画はパネリストにとって刺激的かつ爽り多いものであったことをまず記しておきたい。筆者が担当したのは近年再評価の機運が高まっているエリザベス・ボウエン。保守的なリアリズム作家とみなされてきたボウエンの後期の作品をとりあげ、その感情（emotion、affect）という側面に焦点を当てた。背景にあったのは今世紀に入り目覚ましい勢いを示す感情史という分野の研究や、これに連動する感情、情動への関心の高まりである。端的に言えば個の身体を超えて拡張する意識や感情、もしくは透過性のある身体である。感情は身体と二項対立的関係にあるものではなく、両者は連動したものと見るのがここ 30 年程の流れであり、ディビッド・ヒルマンとウルリカ・モードが編集した『文学における身体』（2015）などもこの事情をよく伝えている。人間を感情、情動からとらえなおそうとする情動的転回（affective turn）と称される研究動向も生まれ、また 19 世紀の 60～70 年代にピークに達した身体的興奮を生み出す Sensation Novel へも新たな関心が向けられている。G.エリオットの大方の作品がまさにこの分野の最盛期に書かれていることなどを手掛かりに、ボウエンの感情表現とエリオットのそれとのつながりを、感情とリアリズムという観点から考察し、そのモダニティを読み解くことを試みた。

■報告 3

G.エリオット『ロモラ』と A.S.バイアット『抱擁』に見る歴史認識

都留文科大学名誉教授 窪田 憲子

バイアットの *Possession* と G.エリオットの *Romola* はどちらも過去の時代をとりあげた「歴史ロマンス」である。バイアットの場合、物語は現代の英文学者たちの世界と、彼らの研究対象であるヴィクトリア時代の詩人たちの世界の 2 つに分かれている。19 世紀の架空の偉大な詩人の隠れたロマンスの謎解きを追いながら、バイアットが掴みだしているのは、19 世紀における科学ないしは疑似科学が人々に与えた認識の変容であり、それを 1859 年（ダーウィンの『種の起源』の発表年）に起こった人物たちの行動の謎に絡ませて示している。一方、『ロモラ』においてクローズアップされているのは、近世曙のフィレンツェの社会である。物語は 1492 年のメディチ家の当主ロレンツォの死から始まり、それによっておこるフィレンツェの政治的混乱が、ロモラの宗教的思想の変容とともにあぶりだされている。作中何度となく 1492 年（コロンブスがアメリカに向け出帆した年でもある）という年が語り手によって言

及され、この年の重要性が象徴的に示されている。このように、この2作品においては、世界史的にも重要な年を核として、物語が展開され、個の人生を通してそこに時代の流れを見ていきたいという両作家の歴史認識を知ることができるのではないかと、ということを考察した。

■報告4

現代エジプトにおける G.エリオット作品の継承と書き直し
—A.スウェイフの *In the Eye of the Sun* (1992) を中心にして

北九州市立大学准教授 濱 奈々恵

本発表では、ポストコロニアルの時代における G.エリオットの受容を確認するべく、エジプトとイギリスに文化的なルーツを持つアハダフ・スウェイフ (Ahdaf Soueif: 1950-) と彼女の作品に注目した。スウェイフが誕生した当時、エジプトでは反英感情が優勢を占めていたが、彼女は英文学者の母に連れられて、1955年と64年にロンドンで教育を受ける稀有な経験をしている。当時の英文学研究は F.R.リーヴィスの影響が強く、英文学は正しい生き方を示す指針と同義であった。本作品の主人公もスウェイフも政治的、あるいは個人的な激動の中で英文学、特にエリオットと共に生き、折に触れてエリオット作品と自分たちを重ねている。だがその重ね方は必ずしもイギリスに憧れ、理想化する「イギリス礼賛」とはならない。最も特徴的なのは、エジプト版 *Middlemarch* として評される本作品において、女主人公 Asya が性的に奔放な女性として描かれ、夫以外の男性と関係を持った挙句に離婚して、大学教員になるというジェンダー規範からの逸脱であろう。ところが、エジプトで「新しい女」になりえた Asya の前にはナショナリズムの高揚が立ちほだかり、英文学は正しい生き方どころか敵国の言葉としてしか認識されない。両者の文化的融合は容易に成し遂げられず、スウェイフもその点を意識していた可能性を指摘した。

■特別講演

環境文学としてのジョージ・エリオット作品——風景、家屋、社会

慶應義塾大学教授 原田 範行

原田先生は、「ジョージ・エリオット作品の魅力の一つは、風景と情景が、歴史と現在が、家屋の細部と社会的動向が、あるいはまた人物の行動規範と微妙な心理の襞が、有機的に結びついて圧倒的な迫力を有しているという点にある。何気ない日常風景が多義的に人物や社会の脈動を映し出し、また個々の人物の行動には理念や思想、常識などとともに特異な情念や感性が分かちがたく結びついている」と主張され、*Felix Holt* の冒頭に描かれたイングランド中部の美しい風景には、人間の生活、行動、性格が書き込まれていること、*Adam Bede* における Hetty の美しさを表現するために比喩表現でなく、常識的な身体感覚に訴え、赤ん坊の可愛さとバター作りの際の優雅さを合わせることで、広く非言語的なるものの言語化に成功していること、登場人物に方言を話させることも非常に芸術的であって、日常生活の一部を描いて全体を表していることなどを、例として挙げられた。さらに、このように *circumference* が広いことがエリオットの文学的特質であるとする Henry James や、エリオット文学の特質を、日常生活の細部から歴史的傾向を構築する点にあるとする Margaret Harris を引用され、エリオットのリアリズムの魅力を縦横無人に説かれた。(文責: 石井 昌子)

◆新コラム◆

<英国本部便り>

英国本部では今年大きな節目を迎えている。英国本部のニューズレター(3月号)に掲載の通り、3月25日(土)に Annual General Meeting が開催され、会則の改訂とともに役員改選が行われ、以下の役員が選任された。

尚、昨年度の総会におきまして、会員の方々（学生会員を除く）にも大会参加費をお1人 500 円いただくことが決定されました。協会の運営費確保のため、ご協力の程、お願いいたします。

第 26 回全国大会シンポジウム 題目：『フロス河畔の水車場』再考（仮題）

司会・講師	池園 宏（山口大学教授）
講師	植松 みどり（和洋女子大学名誉教授）
講師	大竹 麻衣子（桜美林大学教授）
講師	鴨川 啓信（京都女子大学教授）

シンポジウム要旨

本シンポジウムの発案の由来は、この数年、ジョージ・エリオット協会内で『フロス河畔の水車場』を再考する機会への機運が高まりつつあるのを感じていたことにある。2022 年の夏に植松みどり氏がジョージ・エリオット全集（彩流社）の第 3 巻として本作品の新訳を上梓され、さらに、大竹麻衣子氏を中心とするグループによって本作品を底本とする教科書が出版される見通しとなっている。いずれも協会が主催するプロジェクトの一翼を担う貴重な業績である。また、振り返れば、協会発足後の第 1 回大会のシンポジウム対象作品が『フロス河畔の水車場』であった。それ以降に本書単体を対象とするシンポジウムは行われていない点を考え合わせると、ちょうど四半世紀を経たこの時期に、改めて『フロス河畔の水車場』を俎上に載せることには意義があるだろう。

もちろん、今回の企画いかににかかわらず、これまでも本作品に関してはあまたの研究が蓄積されていることは言うまでもない。本シンポジウムにおいて登壇者の面々が共有するのは、『フロス河畔の水車場』というテキストをさらに身近で親しみ深いものとするためのアプローチという視点である。総じてエリオット作品は質量ともに重厚で、読み手に対し一定のハードルを要求するという一般的イメージがあるが、『フロス河畔の水車場』もまたおそらくその例に漏れないだろう。その点は十分に踏まえつつも、今回はできるだけ多彩で親しみやすいアプローチの数々を提示する形で作品の再考を試みたい。植松氏には上記の業績をもとに翻訳の立場を通して見えてくるもの、大竹氏には現在進行中の教科書執筆の立場を通して見えてくるもの、鴨川氏には専門とするアダプテーション理論をもとに『フロス河畔の水車場』の映像化作品を通して見えてくるもの、池園は本作品における子ども性という側面を通して見えてくるものというように、各人が独自の視点から考察を行うことで、本作品の新たな魅力を見出すことができると考えている。（池園 宏）

第 26 回全国大会特別講演のご案内

本年度の特別講演には、金子幸男先生（西南学院大学教授、日本ハーディ協会会長）を講師としてお招きします。先生は 19 世紀のイングリッシュネスを研究対象とし、これまでに「田舎に向かう 19 世紀のイングリッシュネス—カントリーハウスとコテージにみるホームの変遷—」（京都大学博士学位論文）、「ブリティッシュネスからイングリッシュネスへ—イングランドの田舎というホーム 1870-1914—」（京大英文学会『アルビオン復刊』第 67 号）、「コテージ・イングリッシュネス—ジョージ・エリオット『サイラス・マーナー』における老人表象」（開文社『英語圏小説と老い』）、「『ハワーズ・エンド』とイングリッシュネス—ナショナルなホームと風景を求めて—」（英宝社『英国小説研究』第 27 冊）、「『ピーター・パン』における子供とイングリッシュネス—ダーリング家とネヴァーランドというホーム—」（西南学院大学英語英文学論集 第 56 巻（2・3 号合併））など数々の論文を発表されました。特別講演のタイトルは「ジョージ・エリオットとトマス・ハーディのイングリッシュネス—カントリーハウスとコテージのある田舎の風景—」です。皆様、奮ってご参加ください。

講演要旨

19世紀、産業革命による都市化と経済の自由主義がもたらす諸問題によりイングランドの人々が田舎に肯定的な目を向けるようになった。そのような田舎嗜好は、新自由主義とグローバリズムがもたらした社会不安の中でイングリッシュネスを問うようになったここ数十年間も変わらない。多くの評者は田舎にこそイングリッシュネスがあると考えてきた。このような考え方に立ち19世紀の田舎を二人の小説家において分析するにあたり、カントリーハウスやコテージ、そして村は田舎のアイコンとして考察するに値する。エリオットは中部イングランドの田舎を『アダム・ビード』(1859)に、ハーディは南部イングランドの田舎を『テス』(1891)に描いた。前者は18世紀から19世紀への変り目の田舎、後者は世紀末の田舎を描き、100年の相違がある。100年で田舎の表象にどのような変化がみられるのだろうか。この講演では、イングリッシュネス研究の現在を概観しながら、二人の作家の田舎の表象を、上記二作品以外にも目配りしながら、イングリッシュネスの観点から眺めていきたい。

第26回全国大会研究発表者の募集

発表テーマ： ジョージ・エリオットに関連したもの 発表者数： 1～2人(予定)

応募資格： 日本ジョージ・エリオット協会会員 応募締切： 7月25日

発表時間： 30分(発表25分、質疑応答5分) 時間厳守でお願いいたします。

レジュメ： ワープロA4版で、約400字程度。発表題目には、英文名も添えてください。

※ 原稿には、氏名・住所・所属・電話番号・メールアドレスを明記してください。

宛先： 〒769-2193 香川県さぬき市志度1314-1 徳島文理大学香川校 中島正太研究室内

日本ジョージ・エリオット協会事務局/E-mail: georgeeliot.japan@gmail.com

応募は郵送、またはメールで、お申し込みください。応募者多数の場合は、調整させていただきます。

※ 本協会は、学生会員の研究活動を支援し、研究発表を奨励しております。学生会員が発表を希望する場合は、発表のレジュメに指導教員の推薦文(書式自由)を添え、7月25日までにメールにて事務局にお送りください。

2024年度『ジョージ・エリオット研究』第26号への投稿論文募集

2024年11月に発行予定の学会誌『ジョージ・エリオット研究』第26号の投稿論文の締め切りは2024年4月1日(月) 厳守です。奮ってご応募ください。投稿規定およびチェックシートは、協会のホームページ(<https://www.g-eliot.com/ronshu>)からダウンロードすることができますので、必ずご参照ください。論文の他にも書評を募っておりますので、新刊書などの書評をご希望される方は、編集委員長の新野緑先生、もしくは事務局まで、お早めにお申し出ください。

会費納入のお願い

会費納入につきまして、お願いいたします。年会費および振込先は、以下の通りです。

一般会員 7,000円(国内会費5,000円と英国本部会費2,000円)

英国本部に登録された終身会員 5,000円(国内会費のみ)

学生会員(大学院生、学部生など) 2,000円(本部会費を含む)

振込先(郵便振替口座): 00960-0-105579 日本ジョージ・エリオット協会

*手数料はご負担いただいております。

なお、事務処理の都合上、9月末までにお振込をいただきますよう、ご協力をお願いいたします。ご承知の通り、本協会は英国ジョージ・エリオット・フェローシップの支部をかねており、毎年1月に英国本部に会費を送金しております。会費納入が年を越しますと、本部への送金に間に合わず、本部からの郵送物が受け取

George Eliot Newsletter of Japan 第 27 号

発行者 日本ジョージ・エリオット協会

代 表 廣野 由美子

編 集 濱 奈々恵

事務局 徳島文理大学香川校 中島正太研究室内

〒769-2193 香川県さぬき市志度 1314-1

TEL 087-899-7152 (直通)

E-mail georgeeliot.japan@gmail.com

Homepage <https://www.g-eliot.com/>

振替口座番号 00960-0-105579

発行日 2023 年 6 月 1 日